「老い」は人を澄んだ境地にする （鈴木幸一氏の経営者ブログ）

2014/1/28 7:00|日本経済新聞　電子版

鈴木幸一（すずき・こういち）1946年9月生まれ。国内インターネットサービスの草分け。インターネットイニシアティブ（IIJ）を設立し、郵政省（現総務省）との激しいやりとりの末、93年にネット接続サービスを開始。後に続くネット企業に道をひらいた業界の重鎮。酒、タバコ、音楽と読書を愛し、毎春、東京・上野で音楽祭を開催、自宅は蔵書に埋もれる

「あんまり物忘れがひどいから、いよいよ認知症の始まりだと、大学病院で診てもらったの。ひどくなる前に、さっさと自分で施設に入ろうと思って。人さまに迷惑をかけるのだけは、いやなの。そうはいっても、かけてしまうことになるのよね。検査結果は、人並みのボケ程度で、心配していた事態とは違ってよかったけれど、自分の見立てでは、老いによる呆けを越している気がするわ。検査をいっぱいしてくれたけど、お医者さん、信用できるのかしら。ほんとうに、年をとって身体は元気というのも、困ったものよ。お医者さんには、兆候があったら、すぐに教えてもらうことを念押ししたの。進行を遅らせる薬とか、お医者さん、いろいろ教えてくれたけど、年をとるのも、大変。あなたの電話番号だって、探すのに大変だったのよ」

70代後半になるひとり暮らしの親類の老女から、久しぶりに電話があった。勝手にまくしたてて、話し終わると、こちらの話を聞こうともせず、がちゃんと電話が切れる。若い頃から、わがままで身勝手という評判だったのだが、その分、年をとっても気丈で、誰にも迷惑というか、世話にならず、気ままに暮らしているらしいのだが、ボケに対する恐れは、人並み以上のようだ。「年をとれば、物忘れは当たり前ですよ」と言うと、「なにを当たり前のことを言っているの、そんな基準を超えて、いくらなんでもひどくないかしらと思ったから、大学病院に行ったのよ。あなたも、お酒ばかり飲んで、平気なの。他人はなかなか、本当のことを言ってくれないから、自覚した方がいいわ」。大きなお世話だと答えようとしたら、電話は切られてしまった。

「年齢を重ねることで、人は精神も心も澄んでくる」

「老いること」は、さまざまな濁りが消えることで、それは素晴らしいことであると、そんな言葉を読んだ記憶があって、折節、ふと思い出すことがある。私自身、前期高齢者になって、古くからの知人や友人も、ひと昔前なら、「老境」と言ってもいい年齢になっているはずが、私も知人も元気なうちは、「老境」といった意識はない。まして、すべてが澄んで透明ということにはなっていない。90歳まで生きる長寿が珍しくなくなっている現在では、昔と違い、物理的な年齢による老い方、その暮らしぶりは、ずいぶんと違ってきている。それでも、高齢者になれば、「澄んだ心」になる前に、病にかかることも増え、突然、友人や知人の訃報に触れることも多くなっている。当たり前といえば、当たり前の話である。

昨年の10月に82歳になったスパイ小説の大家、ジョン・ル・カレの新刊本の翻訳が本屋の店頭に積まれていたので、まだ現役なのかと、早速、読んでみる。『誰よりも狙われた男』（A MOST WANTED MAN）というタイトルで、ハンブルクを舞台に、ロシア、トルコ、チェチェンの問題を背景に、ドイツや米国の情報部が暗躍するスパイ物である。若い頃の作品と違い、細かいディティールを書き連ねて独特の世界をつくっていくことはなくなってしまったのだが、素早く、次々と画面が変わって引きずり込む映画のように、ともかく読ませる腕は、衰えを感じさせない。昨年の春には、『A Delicate Truth』という新刊が上梓（じょうし）され、近々、その翻訳が刊行されるという。元気なものである。どうも、高齢になるほど、その活動や生き方の個人差は大きくなるようだ。「70歳を過ぎたら、年齢というのは、まったく個体差になる。だから、物理的な年齢のみを当てはめて、人を評価してはいけないのだ」。いつも物知り顔の友人は言う。80歳を超えて、次々と新作を書き続けているジョン・ル・カレなど、その物理的な年齢を考慮すること自体、誤っているのだろう。

80歳を超えて、ますます音楽そのものの形だけを、宝石を磨くようにすくいあげて、耳を澄ますと、あらゆる煩雑物が消え去った演奏を聴かせてくれた指揮者のクラウディオ・アッバードの訃報があった。晩年は、胃がんの手術に始まって、度重なる病魔との闘いで、頬（ほお）は削げ落ちて痩身そのものといったアッバードだったが、最初の手術から間もない頃に、ベルリンフィルと演奏したベルディのレクイエムをたまたま聴く機会があって、その変わりように驚いた記憶がある。レクイエムは、まさに死者の鎮魂なのだが、かつてのアッバードの演奏は、深く暗い悲しみだけが表現されていたのだが、病後の演奏は、そこに、透明な明るさも表現されているようで、死について、違った思いが醸し出されていた気がしたのである。

知人の大指揮者、リッカルド・ムーティさんに私が主宰をする音楽祭でベルディの「レクイエム」を演奏していただいた時に、「あかるさを感じたのですが」と感想をもらしたら、「死は悲しいことだけど、死は暗く深い悲しみだけではなくて、死というものには、救いのあかるさがないといけないのだ」。ムーティさんの答えである。大病を経て、アッバードの演奏に、

ムーティさんとは違った意味で、死が暗い悲しみだけではない「あかるさ」を暗示する表現がなされていたようだ。ここ数年、アッバード指揮のモーツァルトの音楽を耳にすると、あらゆる言葉を捨て去った、モーツァルトの音楽そのものが、あらゆる言葉を虚しくする深遠な美しさを湛えた演奏で、聴く者の身体に感動が走る経験をしていたのだが、訃報を目にした時、ふと、モーツァルトがウィーンで、ドン・ジョバンニの作曲をしている頃、故郷のザルツブルクから父親が重体であるとの知らせを受けた時に書き送った手紙を思い出した。

――死は人生の最終目標ですが、数年このかた、ぼくは真実の最上の友にすっかりなれてしまったので、もはや死の面影はいささかも恐ろしくないばかりか、大いに心を静め、慰めてくれます。そしてわれわれの真の至福への鍵として死を考える機会を与えてくださったことを神に感謝しています。――（1787年4月4日付の手紙）

「老い」を考えることは、とりもなおさず、死を考えることでもあるのだが、超高齢化社会が進む日本にいると、「老い」を考えることは、すなわち、高齢者に対する負担、財政破綻の下での社会保障費の増大といった現実的な問題に話が向いてしまって、「老い」そのものについて、その意味を考えることを忘れがちになってしまう。病がつきものでもある高齢化による社会保障費の増大に対する対応こそが、わが国の財政再建にとって、決定的な重要事項であることを疑う人はいないけれど、そこだけに視点が行くと、ついつい「老い」の本質を考えることを置き去りにしてしまうようだ。

認知症や呆けの恐怖に、自ら立ち向かわざるを得ない親族の老女の話や、アッバードの訃報、ジョン・ル・カレのように、老いてますます旺盛な活動などを考えると、ふと、別な次元で、「老い」について考えたりする。そういえば、「晩節を汚す」とか、「老兵は消えるのみ」といった誰も知る昔ながらの言葉もあった。うまく老いるというのも、難しいことだと。認知症を心配する親類の女性にしても、私が「老女」などという言葉で表現しているのを知ったら、「失礼な」と怒るに違いない。父親の危篤の知らせに対するモーツァルトの、死に対する不思議な明るさが響く手紙を理解するのも、難しくなった時代ではあるのだが、せめて、老いることで、精神も心も澄んだ域になったくらいは、言ってみたい気もする。

鈴木幸一IIJ会長のブログは毎週火曜日に掲載します。

鈴木幸一　IIJ会長のブログでは、読者の皆様からのご意見、ご感想を募集しております。
こちらの投稿フォームからご意見をお寄せください。

読者からのコメント

小倉摯門さん、60歳代男性
南洲翁遺訓第三十「命もいらず、名もいらず、官位も金もいらぬ人は、仕抹に困るもの也。道に立ちたる人ならでは彼の気象は出ぬ也」を想い出しました。今回の鈴木さんのブログはこの遺訓と対を成すものですね。それにしても今回鈴木さんが採用された技法は控え目で素晴らしい！ 都知事就任を目指し闘っておられる細川護熙候補と小泉純一郎さんのお二人に一言の言及もない。まあ、如何に優れた言葉であっても例外はある。老いが人を済まさない例外もある。特に政治人には深く老境に立ち入っているのに、彼らお二人とは逆の意味で「仕抹に困るもの」が少なくない。

ビジネスリーダー トップに戻る　ビジネスリーダー Menu一覧　経営者ブログ トップ

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.